

中城まさお一人語り

散れ山桜

神風特別攻撃隊第一隊敷島隊隊長関行男23年の生涯

昭和19年秋、日本軍はついに体当たり攻撃隊を編成した。古今未曾有の作戦である。今後繰り返す事があってはならない作戦であるが、一方、決定的に負けが込んだあの時点としては抵抗の最後の手段であった事も事実である。多くの若者は、武士道の究極にあるこの作戦にすがすがしい笑顔を残して散って行った。その後占領軍による悪宣伝ほかで中傷される事が多かったが、国のために一命をなげうった英霊を顕彰する事なしに国防を

論ずる事はできない。9・11航空テロを「カミカゼの再来」と報じた外国の報道があったが、婦女子を含む民間人をターゲットにするなどは武士道に基づくカミカゼと遠く隔たるものがある。これまでも特攻を扱った映画や舞台はあったが、戦後のもろもろの価値観に配慮する余り主題がぼやけてしまっている。まず何より当時のありのままの姿を描こう。そして混じり気なしの慰霊、顕彰の念を捧げよう。すべてはそこから始まるのだ。

関行男。海軍兵学校卒業の一か月後が真珠湾攻撃、日米開戦であった。短い艦隊勤務のち志願して航空隊に入隊。内地から届いた慰問袋が縁で鎌倉に住む裕福な家庭の娘満里子と結婚した。三か月後、フィリピンの最前線基地に転出を命じられた。そこへ第一航空艦隊司令長官として着任した大西滝治郎中将が特攻作戦を下命した。大西は海軍航空隊育ての親の一人と言われ、部下からの信望が厚かった。関は特攻第一隊の隊長に任ぜられた。彼等は五日間出撃と帰投を繰り返したのち全員体当たり成功、空母一隻轟沈を含む大戦果を上げた。日本はその後十か月近く頑張ったが、昭和二十年八月十五日ついに条件降伏した。ちなみに大西長官は終戦の翌日部下の功績に謝辞を述べながら割腹して果てた。



撮影 松原寛氏